

第26回OMS戯曲賞選考経過 —2019年12月18日—

九鬼葉子

5時間30分の大激論。OMS戯曲賞史上最長ではないが（最長は第9回の5時間58分。その時の大賞はサカイヒロト、佳作が芳崎洋子）、稀にみる長丁場となった。しかも大賞は決まらず、佳作3本という、史上初の結果。何が混迷を呼んだのか？ 詳細をレポートしたい。

関西の新しい才能の発掘と、中堅劇作家にエールを送ることを目的に、大阪ガス株式会社主催、大阪ガスビジネスクリエイト株式会社の運営で開催されているOMS戯曲賞。扇町ミュージアムスクエアが閉館して16年になるが、戯曲賞は継続され、今回（2019年）で26年。関西の劇作家の目標として、また新しい才能との出会いの場として定着している。

今回の応募作は48作。うち16作が初応募。最終選考に残ったのは9人で、初登場は二人。FOペレイラ宏一朗と田中浩之。田中は俳優で、初めて執筆した長編戯曲を初応募。今回から新しい選考委員として、佃典彦氏、土田英生氏、樋口ミュ氏が加わった。

選考会開始は12時30分。まず投票を行った。例年は、○×△をいくつ付けてもよいことにしていたが、今年は司会の岡野宏文氏から○を一つにとという提案があった。ただ佐藤信氏から、△も付けるほうがよいという提案があり、大賞に推す作品に○を一つ、ほかの委員の意見も聞いて論議したい作品に△を複数付けることになった。また、佃氏からの提案で、×は付けないことになった。

	佐藤	鈴木	佃	土田	樋口
FO		△			△
田中	△		○	△	△
榎瀬	△	△			
中川	△			△	
中村	△		△		
魔人		△			△
山崎		△		○	
山本	△		△	△	○
横山	△	○	△	△	

結果を見た司会の小堀純氏が一言、「長くなりそうですね」。1作ずつ、所見を述べることから始まった。

FO ペレイラはプロットのドラマ化を

プロトテアトルの FO ペレイラ宏一郎は、最終選考会初登場。劇団の旗揚げは2013年、近畿大学在学中に結成された。

『どこよりも遠く、どこでもあった場所。あるいは、どこよりも近く、なにもない。』は、母と二人で暮らす男が主人公。幼い頃父が失踪、母が女手一つで彼と妹を大学まで行かせた。男は大学で映画監督を志したが、母が過労で倒れたため中退。家計を支え、妹には大学を卒業させた。男は映画館で、安月給で働きながら、今も脚本を書き続ける。夢が諦めきれず、しかし、どうにも変えようのない人生。平穏な昔の家族の記憶が詰まった家からこそ、保たれていた心の均衡。だが、実家を改装し妹夫婦が同居することになり、蓋をしてきた思いが溢れ、書きかけの脚本すべてにエンドマークを付けて家を出る。かつての父と同じように。

佃氏は「恐らく、置いてけぼりにされた男の話。父に置いてけぼりにされ、妹から取り残され、リフォームに夢中の母に乗り遅れ、ついに家も新しくなる。周りのスピードに追い付けなくなる感じに共感できた。大家の話に始まり、シーンの終わりに必ず男の語りが入り、シーンをまとめて次のページに行く、という構成が、あまりにきっちりしていて、少々物足りないが。最終的に男が映画を撮ろうと思い、シナリオを書き上げ、現実から取り残される。現実には追い付いていない時点で、彼のあり様自体が家という現実の中で虚構なのだから、彼のあり様そのものをカメラに収めるほうがおもしろいのではないかと、指摘しつつ評価した。

また佃氏が「男と妹が近親相姦なのか？と思わせるくだりがあったが」という言葉に対して、土田氏が「違うんじゃないかな」と語り、樋口氏も「大阪的つつこみと読んだ」と語った。さらに土田氏が「そのわりにつつこみが遅く、しばらく聞いてしまうので、勘違いされるのかな」という言葉もあった。

樋口氏は『『ガラスの動物園』を読んで、消化した作品だと思った。男はトムであり、ローラも染み込んでいる。『じゃあない』という言葉が何回も出てくる。家のことがあって、やりたいことができなかつた。じゃあない。なんとも言えない大阪弁のニュアンスが滲み出ている。大阪弁は勢いがあると思われるが、やんわりした力もある。名作を読み込んで、消化するのは、若い時に取り組むべきことで、その意欲に△を付けた」と評価した。

鈴木裕美氏は『『ガラスの動物園』がキリキリする痛みだとすると、これは鈍痛の痛み。現代日本で書くとこうなるのか、というおもしろさがあった。ただ『ガラスの動物園』を知らない人に、おもしろさが伝わるかどうかはわからないが。会話には課題が残る」と評価。

佐藤氏は「僕の役割はなんだろうと考えた時、年をとった自分はハードルを高くしようと思った。厳しく言うと、この作品にはドラマがない。プロットの説明になっている。プロットはおもしろいが、ストーリーやテーマ、劇的ドラマのない演劇が多くなっている。

男が枠組みを作る人間になっている」と指摘。

土田氏は「男が真綿で締められるように取り残されていく過程をもっと積み上げるとドラマになる。妹が兄思いで、男には女の影もなく、妹が唯一愛してくれる存在。男が映画を撮ると言うってから、母親が急に怒り出すのだが、母親が、妹やその夫にじわじわと取り込まれて変容していく過程がもう少し描かれていたら、ドラマになった。急に変わったことは、ドラマとして破綻しているところ」と指摘した。

田中作品からは、叫び声が聞こえる

初応募にして最終候補に残った田中浩之。京都で俳優として活動後、アイホール主催の伊丹想流私塾 19 期に入塾、執筆活動を始めた。『サッカバカナ』は、伊丹想流劇塾マスターコースのリーディング公演として発表された作品。

ひきこもりの男・田中が、親戚であるアパートの管理人から頼まれ、孤独死した隣の老人の部屋を片付けることになる。部屋には古い映画の VHS が散乱、そして拳銃があった。心を病んだ田中の妄想と、老人の過去が交錯する。

佃氏が評価した。「人を食ったような展開で、先が読めない。でも、人間関係の配置がよくわかった。人がどうやって死ぬか、どうしたら気持ちよく死ぬことができるかについて書かれた本。台詞が刺さる」。

樋口氏も「読んでいると、叫び声が聞こえる稀な台本。どう生きようか、生きたいのに思うように生きられず、走ってこけて、立ち上がって。作者が始終叫んでいる。拳銃はペニスを表すものだろう。性的欲望。それは生命力につながる。生命力を持て余し、うまく使えずに迷って、自分以外の部屋に入って、静かな一瞬が訪れる。でも翌日にはまた暴走する。命を持て余す男が描かれている」と評価した。

鈴木氏は「今回、『本来の場所に帰りたい』というテーマの本が多かった。田中作品には詩情がある。詩がたくさん聞こえてくる。ただ、結局お客様をどこに連れていきたいのかわからなかった」と、評価しつつ疑問を呈した。

佐藤氏は「第 2 話以降の展開は演劇的。飛躍は多いが、演劇だからこの飛躍ができることをよく知っている。第 1 話はよくないと思う。田中のモノローグになっているが、補助線を引くと、客の想像力の中で展開しない。描こうとする世界が解釈される。孤独死も解釈される。それは違うと解釈を裏返すようなおもしろさが必要」と、評価しつつ指摘した。樋口氏も「第 1 話は作者の言いたいこと＝ト書きになっている。書こうとした思いを先に書かれているが、それがなくても始められると思う」と指摘した。

土田氏は「社会が自分を理解してくれないという自意識を肯定し、社会との齟齬の間でいじける作品が多いが、そのこともよくわかって書いている。思い付きで書いたようには思えない。しっかりしたプロットで書かれた作品で、熱量が落ちないのがすごい」と評価した。

棚瀬作品の表す「社会的マイノリティ」に大議論

南船北馬の棚瀬美幸は、第15回に『ななし』で佳作を受賞している。最終選考には6回目の登場。

『さらば、わがまち』は、なんらかの社会的マイノリティを抱えながらも、自己や他者を肯定して生きる人々をオーディションで募り、彼らの経験談を織り交ぜて編み上げた作品。聾者、車椅子ダンサー、LGBT、在日コリアン、日雇い労働者ら8人の生き方が虚実織り交ぜて描かれ、差別と非差別意識、嫉妬と欲望が顕わになっていく。

佃氏は「仕掛けが刺激的で、舞台はドキドキしながら見られるのだと思う。ただ、登場人物が本物であるのだが、健常者の劇団員が演じようと思えば演じることのできる戯曲。本物でなくても、おもしろければいいのではないか？」とコメント。

それに対し、樋口氏は「棚瀬さんは、戯曲より上演を重要視している。上演をより強い方法にするために、この方法を採用している。今回は、自らをマイノリティと思う人に呼び掛け、コミュニケーションを取った上であるならば、この方法はありだと思ふ。人は必ず死ぬという共通のドラマと、個人それぞれが持つ別個のドラマが重なり、ソートン・ワイルダーの『わが町』を土台にして成功している。ただし引っかけたのは、最後の『しっ、黙って。じっとしていられっやい』という台詞。あまりにも素晴らしく、これは『わが町』から取っているのだが、そこを書くのが劇作家なのでは？ 棚瀬さん本人の言葉で物語を作るほうがよいのでは」と、評価しつつ指摘した。

鈴木氏は「初演は俳優に当て書きし、再演は新たな俳優で演じて、おもしろく成立する戯曲もある。俳優がご自身で台詞を作るくらいの当て書きで、最初の方は本物がやらないとドキドキしないが、後半は、もしかしたら演じたほうがおもしろいかもしれない。本物から言葉をもらう行為はおもしろい。戯曲賞の対象としては難しいかもしれないが、その行為も戯曲ではないか」と評価した。

佐藤氏は「その意味で△を付けた。車椅子の人もレズビアンも、みな横並びにして、それぞれが演じているが、『ハムレット』にハムレットを連れてきてもおもしろくない。企画自体に疑問を感じる。シングルマザーをマイノリティと名付けるのは何故か？ どの点でマイノリティなのか？ 逆に言えば差別的」と指摘。それに対し樋口氏は「社会でマイノリティと名付けられている人も、人それぞれ個人なんだということが見えてくるように作られている」と語る。その後、佐藤氏と樋口氏の議論が続く。「社会的マイノリティであると、そのまま取り入れること自体間違い」（佐藤氏）。「社会で名付けられたことへの抵抗でやっている」（樋口氏）。「今、公共劇場の企画で、こういうものが出てくる。それは怖いこと。それで助成金を取りやすくなる時代であるということに疑問を感じる。障害者を横並びにするのはどうなのか。社会的マイノリティを集めるなら、もっと無数に集めなければ」（佐藤氏）。

続いて土田氏は「これは企画物なのか創作なのか、と考えた時、どちらにしても中途半

端などところがあるのではないか。本当に台詞通りの設定を持った人をそのまま舞台上に上げたいのか。差別されている人が、差別する側にも回ることを描いているのか。それなら、ドラマの部分が弱い。マイノリティ同士がしゃべってドラマを生み出す所までは至っていないが、それをやりたいのか」と指摘。それに対し、鈴木氏が「マイノリティというのは自己申告」と語るが、土田氏が「そこがエクスキューズになっている」と語る。鈴木氏は「誰がマイノリティだと責任を取っているのかわからない」とコメント。樋口氏は「マイノリティを集め、一人一人が個人なんだ、ということ、最後の手紙で見せたかったのだと思う」と語る。佐藤氏は「演劇自体がマイノリティだという自覚なく、他者にマイノリティというのは、どうなのか」と、議論が続いた。

中川への指摘。話し言葉を使って、普段話さないことを書くのが台詞

遊劇舞台二月病の中川真一は、昨年最終選考会に初登場、最後まで佳作を山本正典と競った若手実力派。

『Delete』は、実在の事件が題材。シェアハウスの同居人の死体遺棄容疑で逮捕された女性の半生を追憶する劇。主人公はサトミ。母と内縁の夫が借金を重ねる中、母の切なる願いは、サトミの弟を大学に進学させ、就職させること。サトミは中学の頃から客を取らされ、高校時代には母の夫の子を妊娠、遺棄。風俗嬢となってシェアハウスのオーナーと関係を持つが、彼は友人のミワコと付き合う。サトミは人生の目的も欲望も見失い、やがてミワコの死体遺棄容疑で無期懲役の判決を受けるに至る。

土田氏は「ある意味、ベタなドラマだが、ベタなだけに読んでしまう。途中、法廷の場面になり、『Delete』を繰り返すパターンが続き、飽きたりもするが。とんでもない話だが、露悪的でなく、自分に落とし込んで書いている。よくできた話。これを○にしていいくらい」と評価した。

佐藤氏は「話ほうまいが、課題は台詞。話し言葉を使って、普段話さないことを書くのが台詞。普通の台詞を横滑りで書くのではなく。そうでなければ、台詞がドラマを説明するものになってしまう」と、評価しつつ指摘した。

鈴木氏は、ト書きについて指摘。「ト書きは、どうやってやるんだ？と、ワクワクするように書かれていなければ」。また鈴木氏は、この戯曲が実在の事件をもとにしたことを知らず、人物すべて創作上の人物と思ったため「こんなひどい人生の人を作らなければ書けなかったものがあるのか？」と疑問を呈した。それに対し樋口氏は「これは実話。忘れたい体験を、なかったことにする病気の主人公を描いている。友達の死をなかったことにする。自分の記憶は消去できるが、一人の命をなかったことにすることはできなかつた。肉体や人生がなかったことにできるか？ なかったことにできなかつたことについて書かなければならない。それが作家の責任。そこは気になったが、単にショッキングなニュースだから書こう、というのではなく、事件と真摯に向かい合って書いている」と、指摘しつつ

評価した。

佃氏は「法廷劇として事件を解明しつつ、サトミ自身を解明している。それを同時に描いている方法がおもしろい。ただ、台本の構成上の仕掛けが多くて、損をしている面はある。手法はおもしろいが、人物の実体験から先が実は書かなければならないこと。サトミの弟だけが、サトミの夢見た普通の生活をしていると書かれているが、この弟は、こんな事件の後、普通の生活でいられるのだろうか。最後にサトミは、切手が欲しいと言うが、これは、手紙が書きたいという意味なのか？ 最後の台詞がこれでよいのか？」と疑問を投げ掛けた。土田氏も「もう1枚ページをめくろうと思ったら、そこで終わっていた」と語った。

時間は1時50分。ここで10分間の休憩が入った。

中村は一次資料の引用を

空の驛舎の中村ケンシは、『てのひらのさかな』で第10回佳作、『追伸』で第20回大賞を受賞している。最終選考に残るのは13回目と、最多記録を更新中。

かえりみちの木』は、山間の村に立つ樹齢千年の大樹の前での、村人達の会話が描かれる。統合失調症の白井は、父への愛憎の下、ピンクさんと呼ぶ自らの分身を作り出す。彼の世話をするソーシャルワーカーの山本は、福祉施設を転々としてきたが、使命感が空回りする。それぞれの抱える現実を描きながら、流転の激しい現代社会の生きにくさと、乗り越えようとする人々の姿が描かれる。

土田氏は「いろんなことを調べて、この世界を作っているが、その題材が身体に落ちて書いている感じがしなかった。戯曲の世界が手触りのあるものとして成立しきっていない気がしてしまいました」と語った。

佐藤氏は「破綻がない。情報は多いようだが、参考文献に統合失調症の資料が載っていない。2次3次資料ではなく、1次資料に戻らないと嘘になる。今はユーチューバーが、経済も科学も、あらゆる領域の情報を提供している。情報への好奇心を持たないと、知的活動の低下につながってしまう。統合失調症を演劇で扱うのは悪くないが、ピンクさんでは収まらないと思う。リアルからの飛躍のために統合失調症を使ったとも言える」と指摘した。

鈴木氏も資料の引用について指摘した。「驚く話、面白い話、様々なエピソードが出てくるが、資料から書いたことが透けて見えてしまう。自分の足で発見して、驚いたことの一つ一つを大切に扱って書かれたほうが良い」。

樋口氏は「生きるために共存することを選んで書いている。ユーチューブやテレビ、本などいろんな情報を見た時、これでいいのか？と、否定と肯定を作者自身が繰り返して書いている。破綻はなく、きちんと書いている。悲しい、生き辛い、といったいろんな思いが全部言葉になっているが、人物が走り出さなかった。作者の思いを書き過ぎて、人物が

人間として走り出していく瞬間が、文字の上ではあるのか？ 演じたら走るのかもしれないが」と、評価しつつ指摘。

佃氏は「何でもないやりとりに、意味深な台詞が書かれていて、読者の興味を引っ張っている。歩という人物が、次のステップを踏めるようになるまでの成長が軸だが、歩が人の話を聞いて感心したり、むっとしたりして、ほかの人との関係がどうなっているかはわかるのだが、歩が行動していなくて、受け皿になっている。行動しない主人公は勿体ない」と指摘した。

魔人は動物の手練れ

超人予備校の魔人ハンターミツルギは、最終選考会3回目。13年ぶりの登場だ。

『ねこすもす』は、マンションの一室で、妻が『ネコが行方不明になりました。』と夫に告げるところから始まる。だが、夫は、うちは猫を飼っていないと言う。妻は、別の世界で飼っていると応える。そこに、この家の主人だというサラリーマンが帰ってくる…。二つの世界を行き交う猫と人間の物語。

土田氏は「最初、すっごいおもしろかった。これはいいぞ！ ただ、始まって3分の1くらいで熱量がなくなり、小手先の笑いになっていっちゃう。雄太郎がニャートラムに乗って景色が変わって終わる。大冒険によって主人公が変わるドラマを書くなら、プロットを見直すべき。入口と出口がつながらなかった」と評価しつつ指摘した。

佐藤氏は「可能性の選択を描いているのかと思ったが、猫の吹き寄せになっている。吹き寄せも考え抜いて書いたと思えない。語呂合わせになっている。25ページのト書きで『喜び合う我が輩とコタツ。沈黙。しらけたムード。なぜかムツとしているお巡りさんと三毛猫』とあるが、このト書きは本当にやめてほしい。俳優が喜び合ったりする、それは何？ 書いている時の作家の勢いなのだろうか、戯曲を書いて他人に渡す、ということ意識してほしい。賞に出すなら、自分でハードルを上げて、個人作家を脱していかなければ」と指摘した。

鈴木氏は「今回は、ありえたかもしれないもう一つの世界、と、帰る場所をモチーフにした作品が多かった。帰るべき所に帰りたい気分が最もストレートに書かれている。毎年千支の動物で書いて、一巡して猫になったそうですね。動物を出すと作家ははしゃぎたくなるものだが、イヌのお巡りさんを出しても、普通に書いているのがおもしろかった」と評価した。それを聞いて土田氏が「動物の手練れですね」とコメント。

樋口氏は「始まりはピカイチ。おもしろい。丁寧に突っ込み、ぼけて、また拾う。きつとこの芝居を観たお客さんを、誰一人こぼさない。一人もこぼさない、丁寧に書かれた本。ただ、実は大きな背景があったのではないかと。それを多くの人に伝えるため、薄めてはいないか？ 突き詰めて書くべきかな。彼の芝居を観る人がみな望んでいることを書いているが、超現実、シュールにできるのにあえてしていない。楽しさとやさしさが詰まっ

ていて、それは観客に対するやさしさだとは思いますが」と評価しつつ、期待を込めて指摘した。

佃氏は「最初の台詞『ネコが行方不明になりました。』で、キッター！と思った。冒頭の数ページは、天才。しかしその後、普通のパラレルワールドになっちゃった。1時間半はもたない」と、同じく期待を込めて指摘した。

山崎は多場面性の必然の再考を

悪い芝居の山崎彬は、第17回に『嘘ツキ、号泣』で佳作を、第24回には『メロメロたち』で大賞を受賞している。最終選考会は8回目の登場。

『ラスト・ナイト・エンド・ファースト・モーニング』は、ニートの朝子が主人公。母から、嫌なことは忘れると言われて育ち、記憶が翌日には半分消えてしまう。ある日、ネットで自分が1歳の頃の写真を見つけ、実母が赤ん坊であった彼女の目の前で殺されていたことを知る。父の乾は、妻を助けられなかった負い目から家を出、犯人をある男に依頼し、殺害していた。一方、記憶喪失の春男は、妻と新しい思い出を築き始めていた。ネット番組で春男の顔を見た乾は驚く。殺したはずの犯人その人であった。思い出のない女と、記憶喪失の男の話が、19年前の事件を軸に収斂する。

土田氏が「引き込まれて読んだ。人物の距離感にドキッとして読めた」と評価した。

佐藤氏は「舞台を見たらおもしろかったのだと思うが、49場面という場面の多さは、必要だったのだろうか。フラグメントを重ねているが、全体の構造をもう少し練ったほうが良い。一つの場面の中に一つの構造がなければ。多場面性の歴史的経過としては、僕の時代にはブレヒトしかなかった。それを福田善之が使い、その後、斎藤憐が使い、いつのまにか多場面芝居が多くなった。多場面は必然なのかを検証したほうが良い。喜劇的作家の作品をもっと読んで『これを超えなきゃ』と。無手勝にはやらないほうが良い」と指摘。

鈴木氏は「お客様のために書いていらっしゃる。悪いこととは思わない。自分が書きたいことをどう構造にしようと思う前に、出たとこ順に書いている。このシーンが書きたかった、という気持ちはある。つなぐために書いたシーンは感じなかった。山崎さんの世界があるんだなと思った」と評価した。

樋口氏は「20年前の母子殺害事件。あの赤ん坊がもし生き延びていたとしたら。被害女性の夫が『司法に絶望した。加害者を社会に早く出してもらいたい、そうすれば私が殺す』と発言したことが報道されたが、そういった『もし』を重ねている。デジタルタトゥーがあり、絶対に消えない今と20年前を並列にし、自分は何によって作られているのか、自分は記憶の総和であり、それを喪失した自分を、何が支えるのかを書きたかったのではないか。次から次に謎を投げ掛け、次のシーンで解決する。どんどん展開し、終結する。おもしろいが、私の興味は薄れていった。朝子と真人の見ず知らずの若い二人が、スマホ画面を通じて語り合う。SNSのなかった私達の時代とは違う人間関係の作り方が、演劇に入っ

てきた驚きがあって、その後ストーリーが教えてくれる。ストーリーを追うドキドキ感を楽しむ人もいると思うが、自分を支える記憶がないところで、自分とは何かを考え、自分の知らないところで世間が自分を知っている、そこだけで展開しても良かった。ストーリーがこれだけ展開されると、読み手の想像力が広がらない。演劇は想像力を掻き立てるものではなかったか」と疑問を呈した。

佃氏は「映像作家の脳で書かれている。ワンシチュエーションでやったらどうなるのか？ ストーリーですべて見せることにより、何が見えてくるのか、すべて書かないことで何が見えてくるのか、そういうことを考えない演劇人が増えた。すべてを見せてくれたことで、僕は何を見たのだろう。記憶喪失の春男と、夫が自殺した風花が会って、見知らぬ男とこんな美しい展開になるのだろうか？ 乾が復讐を他の男に依頼しなければならなかったのは何故なのか。ストーリーとして考えると、そこは突っ込まれる」と指摘。それについて樋口氏は「人に頼んだのは、現実の被害者の夫がおこした行動の方が劇的に思える」と応え、さらに「今、動画のほうが演劇的。スポンサーを付けなくていいから、風刺的なドラマは映像に多い。演劇のほうが月9ドラマになっている」と付け加えた。

時間は2時53分。ここで10分の休憩となったが、3時には再開した。

山本は独特の文体をどう生かすか

コトリ会議の山本正典は、昨年『あ、カッコンの竹』で、最終選考会初登場にして、佳作を受賞している。

『しずかミラクル』は、25世紀が舞台。人類は宇宙法律で禁じられた時間旅行を繰り返して、宇宙裁判により歴史を終えようとしていた。地球は近々ブラックホールに突入する。鳥も虫も消え、海は涸れ、風も吹かない。朽ち果てた海の家には、人間のとおると宇宙人のシズカがいた。最期の時間を二人で穏やかに過ごすはずだったが、シズカは理由も告げずに自殺する。絶望的に悲しい時の「沈黙の音」が聞こえてくるような、繊細な作品。

土田氏は「場数は多くないが、人の出入りがまとめられていない。都合よく出入りする。場の制約があるからこそ、言葉一つで壮大なこともできる。作者がこれとこれを出したいと考えた時、シーンを都合よく切って、次へ行っている。多くの事情をどの場面でどのように出したらいいのかを考える工夫が必要だ。たとえば、ある人物の噂話をしたいから、その人を外に出したいという時、トイレに行かせる。でもすでにトイレに行った後なら、退場させる理由がなくなる。けれど膀胱炎という設定にしたら、何度出しても不思議はない。そういう工夫を探して、踏ん張る作品が少ない気がした。山本作品にはリリカルな情緒がある。もう少し踏ん張って書いてほしい。説明が中途半端で、雰囲気でごまかしている気がする」と指摘した。

佐藤氏は「唐十郎作品は、場面は飛ぶが、トイレの向こうが海になるからおもしろい。死の問題を若い人が扱うのは、生を確かめたいから。シズカの死だけが実体的だが、作品

の中で死の意味するものがわからなかった。ポエティックな感じはする。世界を宇宙に広げた必然性が、ちょっとわからなかった。劇世界をどう運ぶかが文体で、文体を持っていらっしゃる。そのことに自覚的になられて、刈り込んで推敲されるといい。登場人物を減らしてもいい」と評価しつつ指摘した。

鈴木氏は「リリカルを使わなければ書けないところが何かかわからなかった。演出込みで、上演を見たらわかるのかもしれない。アンテナを頭につけるのはかわいらしいし、あえてベタなのだろうが、安易に感じる。文体を使ってどこに連れて行ってくれるのかわからなかった」と疑問を呈した。

さらに土田氏は「人物の心象がト書きで書かれている。『とおるはシズカの足の裏の砂をはらってあげたいけれど、それをするのはシズカだと思っている』と書いてある」と語り、鈴木氏が「お客様にはわからない」と語る。

樋口氏は「作者には、これが見えたから書いた。コントの要素について言うと、壮大なコントとして読んでいいと思う。種族の違う者が出てくる。壮大な『ロミオとジュリエット』の話。個人を最小単位まで分けると、たった一粒になる。一粒の視点から見ると、毎秒奇跡が起きていることを描いている。客席を死者の視点に置いている」と高く評価した。

佃氏は「短い台詞の積み重ねで終末観を出せるのは、すごいなあ、と思った。宇宙人のアイテムがすべてチープで、この嘘のつき方はセンスが良い。久しぶりに円盤を見た」と評価した。

横山の絵本への愛着は？

iakuの横山拓也は、最終選考会7回目の登場の実力派。『逢いにいくの、雨だけど』は、絵本作家の君子が新人賞を受賞するところから始まる。彼女は小学校の時、同じ絵画教室に通う潤に過失から大怪我を負わせ、片目を失明させていた。以来、潤とは会っていないが、受賞作のキャラクターは、無意識に潤が子供の頃に書いた絵を真似たものだったことに気付く。現在と27年前の事故当時の時間が交錯、両家の家族関係を緻密に描いた家族劇。「謝罪」「許容」のテーマが根底に流れる。

土田氏は「確実に自分の書き方を発見された。少し引っかかったのは、幼馴染の男女がそれぞれ別の家庭を持ち、片方が加害者、片方が被害者になる。両者が出会ってからがドラマだと思うが、その親同士としての関係が読みたい。そこがあっさりしていて、後日談として被害者の親が離婚したと出てくる。どうしようもない状況に陥ってからの人間関係が知りたい」と、評価しつつ指摘した。

佐藤氏は「応募作の中で唯一台詞が書けている。2場面設定がうまくいっている。僕は、潤が主役の芝居としていいと思った。ただ、また片目を出したか。なぜ普通のドラマで書けないのだろう。絵本のことをよく調べていない。絵本に愛着を持って、のめり込んでいない。横山さんにそろそろ授賞をと思うが、ほかの方法で書けると思う」と語った。土田

氏が「片目を使うのは、これを使えばドラマになる、という安易さということですか？」と問うと、佐藤氏は「そうだと思う。事件の発端で幼い頃傷つけた人を利用して賞を取った。作家としてイージーではないか。『リチャード三世』を書くとき、リチャード三世側に立とうとする。醜くて虐げられている人の魅力を書く。その転換がなされていない」と語った。

鈴木氏は「演劇人の先輩から『ウニを採ってこい』と言われたことがある。海に潜って、ウニを見つけ『ウニがありました』と報告して終わるのではなく、もう少し息を詰めて潜れば、ウニを採ってくるができる。この作品は、ちょっと採ってきている。前半、人間関係にハラハラさせられる。潤の母と君子の父が二人で食事に行く。でも8時には帰る。ビミョー。どうなっちゃっていくのかと思って読んだ。人物がこんなことを思っている、ということが出揃った時点で出会うから、大変だ、大変だ、ということが起こり、胡散臭い人はやっぱり胡散臭い。流れで読むとおもしろいが、もう少しウニが採れたかもしれない」と語った。

樋口氏は「何の話なのか、私には捉えられない。ひどいことがあった子供達の話なのか。君子が潤に謝りたいと言うが、何を謝りたいのか？ 子供の頃のことか？ 潤の絵を使ったことか？ 謝ってどうしたいのか？ 謝るのは世間的に正しい。正しいことが詰まっている。解決策が平均的にならされたストーリー。一般的考え方で、読んでいて納得できるように書かれている。現在の常識の中で書かれていて、多くの人が納得できる。しかし、常識の中で当然と思っていることに疑問を持って書いたのか？ 実はもっと内側のことが創作ノートに書かれているのではないか？」と語った。

佃氏は「台詞がニュアンス一つでどっちにでもころんじゃうんじゃないかな。役者に細かいニュアンスが要求される。僕はこの舞台に出てみたい。二つの家族がどうなるか、の話なのか？ ダンナと奥さんが親友で、よく食事に行く。男女の間に友情が成り立つか、の話なのか？ 家族がばらばらになるが、父の存在が薄く、子供が事故を起こさなくてもそうなる可能性がある」と語る。

土田氏は「男女の友情が成り立つか、の話ではない。潤の父親は息子が被害を受け、親の監督責任はどうやねん、という怒りと、妻と君子の父親の仲に対する嫉妬、それらが混ざっているのだと思う」と語った。

佃氏が「ダンナと奥さんが親友、という設定、何故これを選んだのだろう」と疑問を投げ掛けると、鈴木氏が「わりとラブストーリーを書きたいのだと思う。潤と君子のラブストーリーを書くために」と答える。樋口氏は「自分の常識、他者の常識、社会の常識が違って、うまくいかないことを書いている」と語り、鈴木氏は「ボーイ・ミーツ・ガールでそれらをつなげるつもりだったのでは」と語る。

佐藤氏は「戯曲はどう演出できるかで変わってくる。27年の時代を置いて、つつましい生活をしようとしているのはおもしろい。人物を介していろんな読み方ができる。ハッピーエンドではないようにすれば、人物の言葉が、無理に言っているとも解釈できる。演劇

は特殊。介在する人が入る余地をどれだけ作るか。10通りの解釈ができる。ほかの作品では、それができない。その点を評価する。欠点は、君子が潤を傷つけたガラスペン。この嘘臭さ」。それに対し樋口氏は「この物語の核だから動かさない。ショッキングなものを出すところから始める。何気ない日常で書けるはずなのに」とコメントした。

全作を語り終えたところで、時間は3時55分。10分休憩をとって、2回目の投票が行われることになった。

票が割れ、膠着状態に

再開後、新しい委員達から、OMS戯曲賞は、どういう方に受賞してもらう賞なのか、趣旨について、改めてお聞きしたいという希望が出された。司会の小堀氏から「基本は新人賞。さらに過去に受賞している人も応募していいことになっている。前の年に上演した作品に限るという条件がある。上演してこそ芝居である、ということがまずある。ただ、一番よかった芝居への賞というのでもなく、あくまで戯曲賞、劇作家への賞である。もともと劇場が作った賞ということで、大賞受賞作はOMSのプロデュースで演出家を変えて上演していたので、上演したい作品、という意味もある。今は劇場が閉館したので、OMSプロデュース公演は行われませんが、再演助成金が出る。大賞の副賞が30万円で、再演助成金は50万円。上演を見たい作品ということもある。そして、若手だけでなく、中堅劇作家へのエールの意味もある」。

佐藤氏から「選考基準は、選考委員が実作者なので、担保は実作。自分がおもしろいと思う作品を主観的に選ぶ」と付け加えられた。さらに小堀氏は「最終選考委員に任せる。1、2次選考には、委員に演劇人は入っていない。あえて自分で演出や劇作をしない人を選んでいる。それぞれの違う角度から、自分が好きでなくても総体的に見て、クオリティがあり、ダイアログが書けているか、ト書きは読めるかなども含め、評価している。まだ見たことのないものが見たい。そういう作家の出現を待ち望んでいる」。

それを聞いた樋口氏から「自分の演劇人生の中で覚悟を持って一つ選べということですね」と確認がなされ、佐藤氏から「年度賞にしよう。この中で一番いい作品を選ぶ。賞の水準を決めてしまうと、出さない年も出てきてしまう。公開選評会があり、選評も書く。推した、推さない理由も語るができる。応募がベテラン作家になると、厳しくなる。過去の作品と比べてどうか、ということも出てくる。関西の芝居を観る機会が少ないので、戯曲として純粋に考えたい。佃さんの、自分が出るんだったら、という話はおもしろい」という言葉があった。

鈴木氏から「過去の応募作と比べてどうだった、という話が出たが、それは必要ないこと？」と質問がなされ、小堀氏は「その話もあっていい」と答える。鈴木氏は「関西演劇界の活性化、というのが大きな目的ですね。前の作品に比べて、こう良かった、という会話も趣旨に沿っているんですね」と確認がなされた。

4時18分、2回目の投票が行われた。まず大賞として○一つを付けることとし、一つも入らなかった作品は対象外とすることになった。

結果は、田中作品に佐藤氏と佃氏、横山作品に鈴木氏と土田氏、山本作品に樋口氏が投票した。

再び論議が始まった。まず田中作品について。佐藤氏は「リーディングしかされていない。冒頭以外は演劇的。横山作品と対照的で、同じまな板で考えるのは難しい。僕は一番おもしろく読んだ」。

佃氏は「一見、暴力的展開。エネルギーがあるが、実はとても繊細な構成。話の真ん中にある老人の居方、死に方がすさまじい」と評価。佐藤氏も「この場面の後にこの場面を持ってこよう、という計算はしている」。

土田氏は「田中と彼女のラストシーンに、じーんときた」と語り、佃氏も「泣けた作品は、これだけ」と推す。土田氏も「僕も好き。好みの問題になる」と語る。

樋口氏は「もし二つ選んでよいなら『しずかミラクル』と『サッカバカナ』。山本作品は、人が生きている。今生きていることに掴みどころがなく、生きながらどうにか掴もうとしている。ナンセンスなところは、彼のセンス。人ってなんだろう、ということをよく考えている。いとおしく感じた。生きている間に考え、のたうち回っていることが書かれている。人間は毎日タイミングを誤る。そんな人間のやっていることを、一個一個摘発している。台詞が鋭い」と強く推す。

次は横山作品について。鈴木氏は「一番ウニを採りに行っている作品」。土田氏は「片目の問題についてだが、この形で成立させるのはかなり難しい。自分の中で律して書かないと。相当な力だと思う。うまさとしては、横山作品」と推す。

佐藤氏は「君子がお母さんのガラスペンをわざわざ絵画教室のキャンプに持っていき、キラキラしている、そのペンで事故が起きる。このわざとらしさが気になる」と指摘。

ここで司会の小堀氏が「土田さん、潤の子供の頃の絵を、君子が無意識に盗作してしまった、ということについては、どうですか？」と質問。土田氏は「その絵で賞を取るのは、フィクションとしてよくない。その絵のことだけに特化されているが、そのほかでも彼女は努力している。そのリアリティがあればOK」と答える。

横山作品の議論が続く中で、田中作品の話が再浮上する。佃氏は「(主人公の)田中は病んでいる」。土田氏も「最初から最後まで病んでいる」。樋口氏は「そんなに病んでいない。自分では病んでいると思っている」と語り、佃氏は「自分の中で誇張している」と語る。

話は尽きず、3回目の投票になる。大賞に1作だけ○を付けることに。時間はすでに5時04分。結果は、田中作品に佐藤氏と佃氏、横山作品に鈴木氏と土田氏、山本作品に樋口氏。2回目の投票と全く同じ結果。通常は、長い論議を経て、少し動きがあるものなのだが。佐藤氏は「違うものを秤にかけている。重さは同じ。田中作品は、作家が主人公に仮託して自分を解き放っている。横山さんは、自分のダークなものを作品に投影していない。投影したらおもしろい。山本作品は、設定を砂漠としたことで通俗的になっている。

横山作品は、文字量が多い。もし僕が演出するなら、三分の一カットする」と語る。

膠着状態に入った。時間は5時10分。4回目の投票をすることになった。大賞に○、佳作に△を一つずつ。ここで選考委員からの質問。「今までは大賞作品に○という形でこの3作が残ったが、今回は佳作も対象になったので、3作以外の作品を含めてもよいのか?」。含めてよいことになった。結果は田中作品に佐藤氏と佃氏が○、土田氏と樋口氏が△、山本作品に樋口氏が○、佐藤氏・鈴木氏・佃氏が△。横山作品に鈴木氏と土田氏が○を付けた。

小堀氏から「過去に大賞にふさわしい作品が2作あった時、大賞と特別賞を授賞したことがあったが、今回は事情が少し違う。それぞれに推す人がいる反面、それぞれに不満がある。特別賞という形は考えないほうが良いのではないかと提案があった。

樋口氏から「田中作品も山本作品も同じくらいおもしろい。ただ、田中さんは作品にこれだけ放出して、次から書くのだろうか?」と疑問を投げ掛けると、佐藤氏は「そこまで踏み込めない。この作品だけで考えよう。普通の戯曲賞なら、このあたりで折り合って、横山作品を大賞にという声が出るだろう。でも、OMSはそうではない」と語る。土田氏も「僕も動かせない」と語る。

鈴木氏が「くだらない質問なんです、田中作品の田中の彼女は、何が良くて田中と付き合っているのですか?」と問うと、佃氏は「田中が彼女のことを好きで好きで仕方ないから」、土田氏は「共依存の関係」、樋口氏は「二人にとってちょうどいい関係」と答えた。

土田氏は「田中作品も推しているが、じゃあ、横山さんから田中さんに替えるのか、というと、それは気持ち悪い」と、主張を変えない。

時間は5時35分。授賞式は6時30分開式。事務手続きのことなどを考えると、そろそろ限界の時間。司会から「田中作品を大賞にし、横山作品を佳作にするのはどうでしょう。○と△を合わせて点数化すると、田中作品が一番得点が高い」と提案がなされた。それについて佐藤氏から「この二人なら、逆だと思ふ。今おっしゃったのは、解決策でしょう。解決策にするなら、横山大賞、田中佳作ではないか。どちらにしても気持ちは割り切れないが。期待を乗せるのか、できている作家を先に授賞とするのか。横山さんに対して失礼だと思ふ。佳作2作というのも失礼」と意見が出された。

小堀氏から「佳作でも本にはなる。佳作2作でもよいのではないかと。田中作品はリーディングでの上演。ちゃんとした上演が見たい」という言葉があった。

しかし、総合点で考えると山本作品も高い数字であるという指摘も。その後、大賞を出すか、出さないか、の議論になる。途中で樋口氏から「山本作品を推せない理由があるとなれば、それは何ですか?」という問いがあるが「今は大賞を出すか出さないか、の話」という指摘がある。土田氏から「もし大賞を出すとなると、また膠着状態になる」という声。鈴木氏から「この現実を考えると、佳作3本では」という言葉があった。樋口氏が「何かを切るのが、賞なのでは?」という問いかけ。佃氏は「大賞を切る」。

ここで、大賞を出すかどうかの決が採られる。大賞を出さないことに、佐藤・鈴木・佃・

土田各氏が挙手。しばらく考えて樋口氏も手を挙げた。佐藤氏から「多数決で大賞を出さないことに決定した」という確認がなされた。

ここで佳作を田中・山本・横山作品の3本にするかどうかの議論になった。佃氏は「選考委員1年目なので、大賞なしは残念だが、僕の中で山本作品と田中作品が競っている」と語った。佐藤氏は「肯定と否定が入り乱れている。三つとも違う作品」。司会から「佳作をどれにするか、1本選ぶ投票をしましょうか？」と問い掛けられたが、土田氏は「3本、どれもいい」と発言。佐藤氏は「最初の投票が○を複数付けていいものなら、足し算で点を決めていいが、最初から○一つだったので、最後までその作品を推していくことになった。全体の経過が見られなかった。さらに議論すると振り出しに戻る。大賞はなしと決まった。3作にほとんど差がない。現実を映すのは3作佳作だと思う」と発言。ここで3作品の佳作授賞が決定した。午後6時。5時間30分の激論であった。

授賞式～新たなる出会いに希望

授賞式は、30分開始を遅らせ、午後7時開式となった。大阪ガス株式会社地域共創部門近畿圏部長の田中雅人氏から賞状と副賞が渡された。

田中浩之氏は「上演した作品でないと応募できない賞。アイホールの伊丹想流劇塾に通っている時に書いた作品で、アイホールでリーディングに取り上げてくださった皆様のお陰です」と感謝の言葉を述べた。

山本正典氏は「2年連続佳作で嬉しくもあり、悔しくもあり。来年挑戦できる気合を頂いた。わがままな悔しさです。嬉しいです」とコメント。

横山拓也氏は「ありがとうございます。OMS戯曲賞にこだわりがある。自分なりの物語の終着点は、まだある。佳作に推してくださった方がいらした。また挑戦したい」と述べた。

授賞式の後、公開選評会が行われ、各作品についての選評が選考委員から話された。その中で佐藤氏から「斎藤憐は、戯曲を書く前に300冊は本を読んでいる。その中から、どこを使うのかを決める。手近なアイテムでなく、時間をかける」という言葉があった。インターネットで何でも情報が安易に入る時代。すべての知的活動に通じる警告の言葉であろう。

最後に司会の小堀氏から「3月に受賞作が出版されます。我と思うプロデューサーは、ぜひ再演してください。演劇は一人ではできない。他者が客席にいないと表現できない、演劇は人間の最も古い表現で、絶えず新しい。まだ見ぬ戯曲に出会って頂きたい。この機会を作ってくくださった、主催の大阪ガス株式会社、運営の大阪ガスビジネスクリエイト株式会社の皆様、ありがとうございました」という言葉があった。

(文中一部敬称略)